

A Valediction : forbidding mourning に表れた話者の内面分裂

後 藤 廣 文

A Valediction : forbidding mourning¹

As virtuous men passe mildly away,
And whisper to their soules, to goe,
Whilst some of their sad friends doe say,
The breath goes now, and some say, no :

So let us melt, and make no noise,
No teare-floods, nor sigh-tempests move,
T'were prophanation of our joyes
To tell the layetie our love.

Moving of th'earth brings harmes and feares,
Men reckon what it did and meant,
But trepidation of the spheares,
Though greater farre, is innocent.

Dull sublunary lovers love
(Whose soule is sense) cannot admit
Absence, because it doth remove
Those things which elemented it.

But we by a love, so much refin'd,
That our selves know not what it is,
Inter-assured of the mind,
Care lesse, eyes, lips, and hands to misse.

Our two soules therefore, which are one,
 Though I must goe, endure not yet
 A breach, but an expansion,
 Like gold to aery thinnesse beate.

If they be two, they are two so
 As stiffe twin compasses are two,
 Thy soule the fixt foot, makes no show
 To move, but doth, if the'other doe.

And though it in the center sit,
 Yet when the other far doth come,
 It leans, and hearkens after it,
 And growes erect, as that comes home.

Such wilt thou be to mee, who must
 Like th'other foot, obliquely runne;
 Thy firmnes makes my circle just,
 And makes me end, where I begunne.

I

John Donne (1572-1631) の *A Valediction: forbidding mourning* は金の metaphor やコンパスの simile で有名な詩である。錬金術による金の、幾何学的な円の metaphor は、およそ愛を語るにはふさわしくない喩えであるが、これらが実に巧みに利用されて愛の永遠がうたわれるのである。しかし愛の不滅を語る話者の論理に欠陥がある。これがさまざまな議論を引き起すのであるが、論理の欠陥は必ずしも詩そのものの欠陥ではない。むしろその欠陥故にわれわれは話者の恋人に対する優しい心遣いを見ることができ、John Donne にはめずらしい豊かな抒情性がこの詩に与えられるのである。例えば論理的欠陥となる金の metaphor からコンパスの simile への突然の転換は、旅の別れを悲しみなかなか泣き止まない恋人をなんとか慰めようとする話者の優しさの表れなのである。表に顕れた詩の意味では捉えられない話者の心の動きをここにかい間見ることができるのである。話者の心の動きは論理の欠陥の中だけではなく、網の目のように張り巡らされた言葉の意味のすき間にも見え隠れしているのである。言葉に二重・三重の意味が込められ、一つの解釈では押さえ切れない意味を形成しているのである。別れを悲しむ恋人を、魂を一つと成した靈的愛の永遠性を語ることによって、なだめ落ち着かせようとする話者も、恋人と同じように別れが悲しく、離れ離れになることに不安を抱いているのである。話者の不安とは不在中の恋人の不貞の恐れであり、悲しみとは性の欲望が満たされないことである。ここに

霊的愛の不滅とはまったく逆の意味があり、話者が霊的愛と官能的愛に引き裂かれていることが表されるのである。この話者の二面性つまり内面分裂は当時吹き荒れた宗教改革、反宗教改革および天文学上の新発見によって靈魂の絶対優位性が崩れ、靈魂と肉体が並置されざるを得なくなった時代の分裂の表れである。これ迄あった価値観が崩壊し、まだ新しい価値が生まれていない時代の無秩序と混乱に投げ込まれた人間の不安と不信による内面分裂が話者の内面分裂なのである。この話者の二面性を同時に論ずるのは極めて困難なので、Ⅱではまずこの詩を話者の論理に沿って考え、Ⅲでもう一つの隠された意味をたどることによって、話者の二面性つまり不安と不信による話者の内面分裂を考えて行きたい。

Ⅱ

‘Valediction’ とは話者とその恋人の別れを指し、旅立つ話者が恋人に別れを悲しむな（‘forbidding mourning’）と言うのであるが、たとえ一時の別れではあれ恋人たちにとって別れは死にも等しいものである。この恋人たちの気持が第一・二連の冒頭の接続詞 ‘As’ ‘So’ による simile で聖人（‘virtuous men’）に喩えられるのである。聖人は騒ぐことなく静かに死を迎え自らの魂に行け（‘goe’）とささやくのである。冒頭行の ‘virtuous men passe mildly away’ には柔らかい滑らかな音が使われており、ここに聖人の死に対する落ち着いた態度が表され、故に自らの魂にちゅうちょすることなく決然と行けと言うのである。聖人にとって死は魂と肉体の分離つまり魂の解放であるから、むしろ喜ばしいことなのである。この聖人の死に対する認識が別れを悲しむ恋人をなだめる話者の論理を構成するのである。別れは二人の肉体の分離で、それによって魂の愛となるのだから、二人は愛の聖人なのだということが示唆されるのである。これは次の二行の聖人の臨終の席にある ‘some of their sad friends’ の聖人とは対照的な言動によって強調される。彼らは「今死んだ」（‘The breath goes now’）、「いやまだだ」（‘no’）と言う。友人たちは肉体の死そのものに関心があり、聖人のように死は魂の解放だということを実感し得ない人々である。彼らは聖人に対していわば俗人と言えるであろう。彼らの言動を示すこの二行には /s/ が多用されている。彼らのひそひそばなしは静まり返った臨終の席にあっては却って強く響き、聖人の ‘whisper’ と鮮やかな対照を成すのである。この俗人と聖人の対比によって二人の愛のあり方が説明され強調され、次の連で俗人が導入されて、二人が愛の聖人であることが明確にされるのである。第二連の前半二行（‘So let us melt, and make no noise, / No teare-floods, nor sigh-tempests move,’）で話者は恋人に、別れは肉体の分離でしかないのだから聖人と同じように泣いたり溜息をついたりして騒がないで、別れようと説明するのである。前行は溜息をついたり泣いたりしないで別れようという意味を表すが、聖人が死を前にして ‘goe’ とだけ言うように、騒がないで行ってらっしゃいと言って欲しいという話者の気持が込められている。‘noise’ は音として表れる悲しみすべてを言う語で、具体的には次行に表されている。また ‘melt’ は難解な語であるがここではまず *OED* にある ‘vanish, disappear’ の意味つまり「別れる」という意味と考えられる。次行の「涙の洪水」（‘teare-floods’）「溜息の嵐」（‘sigh-tempests’）は ‘noise’ の具体化されたものであるが、タイトルの ‘mourning’ の説明にもなっている。二人は愛の聖人なのだから、涙を流したり溜息をついたりしないで別れようと恋人をさとすような口調で静かに話者は言う。これは ‘melt’ ‘make’ の /m/ の柔らかい音や ‘let’ ‘melt’

の /l/ の滑らかな音に表されている。‘teare-floods’ とか ‘sigh-tempests’ という表現は T. Redpath が ‘... commonplaces of Petrarchan hyperbole.’³ と注を施しているようにペトラルカ流の誇張表現である。この決り文句に俗人の愛が暗示され、話者はこれを否定することによって二人の聖愛を強調するのである。俗人には及びもつかない魂の愛を育んでいるのだから、別れを悲しんで泣いてはいけないと話者は言う。この二人の魂の愛に、次の二行 (‘T’were prophanation of our joyes / To tell the layetie our love.’) で宗教色の強い言葉を使って、神秘性を与える。泣いたりして二人の愛を俗人に知られでもしたら、二人の愛の喜びを冒とくすることになるのだと恋人をいさめる。‘layetie’ は聖職者に対する俗人の意味であり、‘prophanation’ は OED で、この二行が引用され、‘The degradation or vulgarization of anything worthy of being held in reverence or respect: cheapening by familiarity.’ と説明されている。これは神聖冒とくの意味と考えてよいが、この二語によって二人が愛の聖人であるばかりでなく、いわば愛の奥義を極めた神秘的な愛を体現しているということが表されているのである。この二人の神秘的な愛を第三連で天球に喩え、俗人の愛を地球に喩えてその違いを更に詳しく説明するのである。二人の別れを天球の震え (‘trepidation of the spheares’) で、俗人の別れを地震 (‘Moving of th’earth’) で表すのである。当時地球は最下位 (トレミーの天文学つまり天動説では地球は天体の中心に置かれた) にあり不純で汚れた存在で、月から上の天球は純粋で完全で不変のものと考えられていた。⁴ 従って天球に喩えられた二人の愛は魂の愛故に純粋で、地球に喩えられた俗人の愛は不純なのである。地震がさまざまな危害と不安をもたらすことを人は知っている (‘Moving of th’earth brings harmes and feares, / Men reckon what it did and meant.’)。地震による危害とは地面の激しい揺れ動きと隆起や地割れによるものであるが、これは別れによる俗人の愛の激しい動揺と愛の亀裂を示唆するものである。T. Redpath が ‘... earthquakes were still generally regarded as evidence of the wrath of God.’⁵ というように地震は何か不吉な兆と考えられていたが、不安の意味するものは俗人の愛の崩壊と別離である。それ故に俗人は嵐のような溜息をつき洪水のような涙を流し大騒ぎをすることになるのである。一方、二人の別れに喩えられた「天球の震動は地震よりずっと大きいにもかかわらず何の危害も不安も与えない」(‘But trepidation of the spheares, / Though greater farre, is innocent.’) と話者は言う。これはわれわれにはわかりにくい表現であるが、地球の自転軸の首振り運動がトレミーの天文学では天球のずれとして説明されていたのである。OED は、この連全体を引用して、

A libration of the eighth (or ninth) sphere, added to the system of Ptolemy by the Arab astronomer Thabet ben Korrah, c950, in order to account for certain phenomena, esp. precession, really due to motion of the earth’s axis.

と説明している。第八天球が軌道からはずれることによって震動が起ると考えられていたのである。従ってこの震動はトレミーの天文学体系の中に組み込まれたものなので、秩序ある調和のとれた天体を乱すものではなく、故に人間に何等影響を与えることはないのである。別れは確かに二人に震動を与えるが愛そのものには影響はないのである。また二人が天球に喩えられることによって、その愛が純粋であることになり、二人の霊的愛がここに示唆される。一方地球に喩えられた俗人は第一連の友人のように肉

体そのものに関心を寄せるのであるから、彼らの愛は官能的と言えよう。これが次の第五連で詳しく説明され、二人の愛との違いが明確にされる。まず俗人の愛が「月下の恋人たちの愛」(‘sublunary lovers love’) と表現される。月下とは地球のことであり、これは前連の地球と呼応するのであるが、俗人の愛を特徴づける言葉である。‘sublunary’ に関して T. Redpath は ‘... subject to change like everything below the moon in medieval cosmology : ... such lovers are subject to ebb and flow like the tides.’⁶ と言っている。つまり俗人の愛は不安定で変り易いということを示唆する語である。彼らの愛は肉体にかかわる感覚(‘sense’) にしかないから、別れは肉体の不在(‘Absence’) を意味することとなる。別れはそのまま俗人にとって愛の終りとなる。このように俗人の愛は不安定で変り易いものなのである。ところで ‘Absence’ には pun がある。OED によれば接頭辞としての ‘ab-’ には ‘off, away, from’ の意味があり、また ‘-sence’ は ‘sense’ と同音一字違いということから、‘Absence’ に感覚から離れるという意味が込められていることになる。このように俗人の愛の官能性が強調されることによって、次の第五連の二人の愛との違いが更に明確にされるのである。二人の魂による愛の純粋さを ‘refin’d’ という錬金術の用語を用いて説明する。二人の愛の純粋さは前連の天球の metaphor で表されているが、‘refin’d’ が次の金を暗示することによって二人の愛は更に深い意味が与えられる。この語は「精錬される」という意味で使われているが、錬金術の用語として考えれば金属に含まれる混じりものを取り除くことつまり純化するという意味がある。従ってこの語は金属を純化させることによって、金を生み出そうとする錬金術上の操作過程の一つ(分離)を表す語である。第二連冒頭行の ‘melt’ もその一つの過程(溶解)を表す語である。因みに M. Willy は ‘elemented’ (St. IV, l. 4) も錬金術と関連のある語だということ指摘している。従って ‘melt’ ‘elemented’ に含まれた錬金術の connotation が ‘refin’d’ で明確になり、次連の金の metaphor へと収れんして行くのである。‘refin’d’ には更にいくつかの意味が込められている。OED に ‘To purify or separate (metals) from dross, alloy or other extraneous matter ; ...’ とある。純化するという意味と同時に分離するという意味があり、*The Extasie* では ‘drosse’ ‘alloy’ (l. 56) が肉体の意味で使われていることから、「精錬された愛」(‘a love, so much refin’d’) とは肉体を分離すること(別れ)によって官能に溺れない愛つまり純化された愛であることを示す語である。また他に ‘To clear (the spirits, mind, etc.) from dullness ; ...’ とあり、これは俗人の ‘joyes’ (St. II, l. 3) の少ない ‘Dull’ (St. IV, l. 1) な愛との違いを説明することになる。二人の愛は魂による霊的な愛なので、俗人の知らない愛の喜びを知っているのである。更にまた ‘To free from imperfections or defects ; to bring to a more perfect or purer state.’ の意味もあり、これによって純粋で変化を受けない安定した天球に二人の愛が喩えられた理由が説明されるのである。このように ‘refin’d’ は実にさまざまな意味を荷ない、天球の metaphor と金のそれを結びつける重要な役割を果たすのである。ところで次の行の ‘That our selves know not what it is,’ とはどういう意味であろうか。二人の愛が精錬つまり純化されて肉体という不純物を取り除いた為に、俗人のように肉体という具体的な愛の対象がないから、自分たちの愛が何であるかわからないということを表すとまず考えられる。しかし天球の metaphor と ‘refin’d’ に込められた意味を考え合わせると、二人の愛が霊的な愛であることがわかる。つまりこの行に俗人には到底達し得ない愛の神秘が表されているのである。この神秘は *The Extasie* に具体的に説明されている。

But as all severall soules containe
 Mixture of things, they know not what,
 Love, these mixt soules, doth mixe againe,
 And makes both one, each this and that. (ll. 33-36)

人はそれぞれ三つの魂を持つことを F. A. Marotti は指摘しているが、複雑な混合物である魂を愛は再び混ぜ合わせて一つにするのである。しかし一つとなった魂は、元の二人の魂がまったく原型を留めない程によく混ぜ合わされてできたものなので、男の魂でもあり女の魂でもあるということになる ('each this and that')。これは魂を一つと成した恋人たちの神秘的な愛を表したものであるが、'That our selves know not what it is,' にも同様の意味が込められていると考えるべきである。たとえば 'it' の指す前行の 'a love' の不定冠詞は名状し難い二人の愛の靈性を示すとも考えられるが、二人の魂によって生まれた一つの愛とも解釈し得る。因みに *The Extasie* では 'If any, so by love refin'd,' (l. 21) と無冠詞で用いられている。'a love' には二人の心の一つにすることによって生れた一つの愛の意味があり、それ故に次行のように心をお互いに確信し合う ('Inter-assured of the mind') ことができるのである。また 'mind' は *OED* で '...; the soul as distinguished from the body.' と説明されており、魂の意味で使われることもある。しかも単数形であることから、二人の魂が一つになったことが示唆されていることがわかる。この一つの魂という考え方が 'a love' 'the mind' に示唆されて、次連の冒頭行 'Our two soules therefore, which are one,' となるのである。また 'the mind' は今あげた *OED* の説明によって次行の 'eyes' 'lips' 'hands' と対照を成す語でもあることがわかる。魂を一つとすることによって、お互いの心を堅く信じ合っているので、俗人程には眼や唇や手がなくとも気にはしないのである。俗人の愛の構成要素である五感 ('Those things which elemented it' St, IV, l. 4) が 'eyes' 'lips' 'hands' に具体的に表され、話者は二人の愛の官能性を否定するのである ('Care lesse, eyes, lips, and hands to misse.'). 問題になるのは 'lesse' という語であるが、これについては III で考えることとする。さて次の第六連の第一行目の 'Our two soules therefore, which are one,' は今述べたように 'a love' 'the mind' に示唆された二人の魂が一つであることを言う句である。従って次の行は旅に出かけなければならないけれど ('Though I must goe') 魂を一つと成しお互いの心を確信し合っているため、旅による別れがそのまま愛の別れとなるのではない ('endure not yet / A breach') という意味を表すことになる。'breach' は「絶交・仲たがひ」の意味で使われて、愛の別れを示す語であるが、「割れ目・裂け目」の意味もあることから、俗人の愛の喩えであった地震による地面の亀裂を想起させる語でもある。つまりこの語は旅による俗人の愛の別れを示す語である。これに対して 'an expansion' (l. 3) という語で二人の愛の不変が説明される。この語は広がりを表す語であるが、この広がりが空気のように薄く伸ばされた金 ('gold to ayery thinnesse beate' l. 4) つまり金泊によって表されている。この金の延展性を利用して、二人は離れ離れになるけれど心は一つ決して愛の別れとはならないことを具体的に示しているのである。また金泊は旅にある話者と恋人の距離の *metaphor* である。この本義と喩義の実質的な距離の差を埋める表現が *A Valiediction: of weeping* にある。

On a round ball

A workeman that hath copies by, can lay

An Europe, Afrique, and an Asia, (ll. 10-12)

つまり金箔が一枚の地図の ‘copies’ であれば、話者がどこへ旅立とうと金箔の metaphor は有効である。因みに T. Redpath は ‘... one ounce of gold, beaten out to the present standard thickness of English gold leaf (1/250,000 in.), would cover an area of 250 sq. ft.’⁹ と言っている。さて金は光り輝く美しい金属なので二人の愛の喩えとしてふさわしいのだが、他の金属のように腐食されない故に永遠不滅の象徴であったことが二人の愛の metaphor として用いられたのである。二人の一つとなった神秘の愛が金に喩えられて、その愛の永遠不滅がうたわれているのである。ところで ‘ayery’ は金箔の薄さを言う語であるが、言う迄もなく空気の形容詞形である。しかし現代とは違い空気には地球を取り巻く空気と天界のそれとの二種類が考えられていた。E. M. W. Tillyard は *Aire and Angels* の ‘aire’ (l. 33) は ‘... is the ether, the pure air surrounding the heavenly spheres.’¹⁰ と言っている。この純粋な空気が天界にあることが示唆されることによって、第三連の天球が想起されるのである。天球の性質は純粋・不変・安定・完全という言葉で表されるが、これは金についても言えることである。いずれも永遠不滅のものと考えられていたからである。もちろん天球と金は二人の愛の metaphor であるから、上述のことはすべて二人の愛に当てはまることは当然である。このように金の metaphor に錬金術の metaphor のみならず天球の metaphor も流れ込んでいる。そのすべてが二人の愛を語り、その愛に永遠不滅を与えているのだから、この第六連はこの詩の結論とすることも可能だと考えられるのである。しかし次に新たにコンパスの simile が導入される。コンパスは主として円を描く為の道具であるが、可動脚の作る円と固定脚の作る固定点とによって ⊙ という図形が想起される。この図形は W. A. Murray が ‘... the current chemical symbol for gold was ⊙, ...’¹¹ と言うように金の象徴である。またコンパスは地図上で地点間の距離を測ったり、ある地点からの等距離の範囲を知るのに使われるので、空間の metaphor があることがわかる。これは先に説明した金箔による空間のそれと同じものである。従って金の metaphor とコンパスの metaphor はつながっているのであるが、しかし第七連冒頭の ‘If they be two, they are two so’ という表現は第六連迄の二人の一つとなった魂が再びここで二つに分けられるのだという印象を与える。また、まったく新しい metaphor が導入されることによって、詩自体の滑らかな連続性がここで断たれることになる。しかしこの話者の論理性の欠如も、話者の論理の裏に隠された感情という点から見直すと、より人間的な話者の姿を浮かび上がらせることになるのである。この詩が話者の独白という形式をとっている為に恋人の気持やその様子は知らされないが、話者のこの論理の中断つまり新しい simile への移行によって、別れを悲しみ泣いては溜息をついている恋人の姿が想像されるのである。旅に出かける話者は別としても、残される恋人が別れを悲しむのは当然のことである。実は話者も ‘forbidding mourning’ と言いながらも同じように悲しんでいるのだが、このことは後に譲りたい。別れを悲しみ泣く恋人を話者はなんとか落ち着かせようとしているのであるが、しかしなんとしても泣き止まない恋人を前にして、話者は困り果て新しい喩えを持ち出して恋人をなだめようと努力するのである。論理の中断はこういう話者の心の動きを表しているのである。もちろんコン

パスの simile によって恋人が納得するとは考えられないが、新しい喩えを使って迄恋人を慰めようとする話者の心は充分通ずるものと思われる。この話者の恋人を思う気持が第七連以下の豊かな抒情性を生み出すのである。さてこの第七連の第一行は先に引用したように魂が二つに分れることを示すのであるが、これは今述べたように別れを悲しむ恋人の気持をくんで持ち出された表現である。従って論理的には明確に表されていないが、コンパスの頭部が一つに合されていることから、ここに二人の一つになった魂が暗示されていると考えられよう。二人の魂の結合の度合は金の喩え程に強くは表せないが、しかしコンパスの形状から二人の魂は二つ（コンパスの両脚）であると同時に一つ（頭部）でもあるということを表すことができる。このコンパスの喩えによって、離れ離れにならなければならないけれどもやはり二人の魂は一つだということが表されるのである。金の metaphor よりコンパスの頭部に込められた metaphor の方がより実状に即すものと思われる。この連二行目の 'stiffe' はコンパスの両脚がしっかりとくっつき合っていることを示し、'twin' はその両脚が同じ形であることを示す。'twin' はまた OED にもあるように双生児を想起させる語である。これは二つの魂が前連の一つの魂によって生み落されたものであることを暗示しているのである。つまり形の上では二つであっても一つのもの二様の表れであるから、二つの魂は形も同じでしっかりとくっつき合っているのである。このようにコンパスの喩えによって話者は別々でありながら一つという逆説をみごとに克服するのである。また 'stiffe twin' は話者の論理を支えるだけでなく、二人は堅く結ばれ心は一つという話者の優しい慰めの表現ともなる。コンパスはまた開脚することも、一方の脚を回転させることもできる。これを利用して旅行する話者と留まる恋人の、またその心のあり方を巧みに描出するのである。これが次の三・四行で示される。恋人が固定脚 ('Thy soule the fixt foot') で話者はもう一方の脚 ('th'other') つまり可動脚で表される。従って今述べた閉脚の時は共に一緒にいて動く様子は見せない ('makes no show / To move') が、可動脚である話者が動けば ('if th'other doe') 恋人もそれにともなって動く ('doth') と言い、コンパスの動きを使って実に巧みに話者は自分と恋人の行動とその心情を捉えるのである。次の第八連でまず開脚したコンパスに二人のありようが喩えられる。「固定脚は中心に静止しているようであり、もう一方の脚が遠くへ行けば身体を傾け身を案ずる」 ('And though it in the center sit, / Yet when the other far doth rome, / It leans, and hearkens after it,') という表現は帰りを待つ恋人の気持を実に的確に捉えている。固定脚の傾斜 ('leans') を利用して残った恋人の心の動きを巧みに具象化しているのである。'sit' は坐って静かに待っている恋人の姿を活写する語であるが、身体を傾け ('leans'), 耳を傾け ('hearkens after it') て恋人は心を絶えず旅先の話者に向け、その身を案じているのである。'leans' はもちろん恋人の身体だけでなく可動脚の話者も同じように傾くのであるから、恋人とまったく同様に 'hearkens' するのである。話者も恋人と同じように恋人を気遣っているのだということがわかり、恋人をなだめ落ち着かせようとする話者の優しい心遣いをここにも見ることができる。また 'leans' 'hearkens' は話者があたかも身近にいることを思わせるような感じを与える語で、これも恋人を安心させようとする話者の心配りの表れと言えよう。お互いを思う気持は同じ、心は一つなのだから帰って来れば今迄通り何の心配もいらぬと恋人を慰めようとするのである。そしてこの連の最終行で恋人の不安や心配を打ち消す為、閉脚したコンパス ('And growes erect') を使って話者が何ら変ることなく無事戻ってくる ('that comes home') ことを述べるのである。また 'sit' 'erect' 'home' の

三語から、家で坐って待っている恋人が立ち上がって話者を玄関に迎える様子が想像されるが、これは朝話者を送り出して夕方迎えることができるという話者の不在の短さを恋人に印象づけることになる。というのは話者の旅行先が大陸と思われるからである。これは金泊の *metaphor* で考えた地球儀に貼る一枚の地図のコピーにヨーロッパが含まれていることによるのであるが、事実 J. T. Shawcross は ‘According to Walton, written to Donne’s wife when Donne went to the Continent with Sir Robert Drury in 16 ll.’¹² と旅先が大陸だと言っている。一般に旅が遠ければ遠い程逆にその短さを言うことによって恋人を慰めようとするものなのであるが、話者もその例にもれず恋人の不安と心配を押さえようとしているのである。それでも泣き止もうとしないと思われる恋人をなだめる為に、次の最終連で再び開脚して円を描くコンパスの喩えを使うのである。話者は「僕にとって君は可動脚のように斜めに走らなければならない固定脚のようなものだ」(‘Such wilt thou be to mee, who must / Like th’other foot, obliquely runne;’) と言い、前連同様うまくコンパスを利用する。‘obliquely’ は前連の ‘leans’ と同一内容を示す語でいずれも両脚が傾き斜めになっていることを表す。しかし ‘leans’ は両脚の広がりつまり固定脚を中心とする可動脚の直線上の動きを示すのに対して、‘obliquely’ は固定脚に対して可動脚が弧を描くことを表す。両方共に空間の *metaphor* がある。また弧あるいは円を描くことを表す ‘runne’ が話者の旅が数箇所にわたり長期間になることを示唆することから、この空間の *metaphor* の方が金泊のそれより具体的で実状に合うものと言えよう。‘runne’ はまた急いで所要を済ますという意味も込められていて、長期間の不在を悲しむ恋人をいわば情動的に慰める働きを成す語でもある。こうして話者は恋人をなんとかなだめようと努力するのである。恋人がしっかりしてくれないと安心して旅に出かけられないという意味を込めて、次の三行目で ‘Thy firmnes makes my circle just,’ と言うのである。固定脚がしっかりしていないと完全な円は描けないことを使って、出発前に不安や心配が解消されないと旅先での仕事もおろそかになり、充分その目的が果せなくなるということを表す。これによって話者は恋人を落ち着かせようとするのである。次の最終行 ‘And makes me end, where I begunne.’ は、前行と同様固定脚がしっかりしていれば完全な円を描くことができるように、話者も「旅を始めたところ」(‘where I begunne’) に無事戻って来れることを示す。逆に恋人がしっかりしていないと戻って来れないことも同時に示され、旅先での浮気をほのめかすのであろうか一種の脅しをかけるような強い話者の態度が表されるのである。こう言われれば恋人も悲しみを押さえざるを得ないであろう。ところで ‘where I begunne’ は旅を始めたところつまり恋人の元と考えなければならぬのだが、実際は円周上の一点から始まりこの点に帰ることしか表されていないので、恋人の元へ帰ることにはならない。ここにも論理的欠陥があることになるのだが、話者の関心が綿密な論理を組み立てることよりも説得にあると考えれば、この論理のごまかしもそれ程大きな問題ではないであろう。さてコンパスの描く円は当然のことながら恋人を慰める為だけに用いられたものだけではなく、二人の愛の *metaphor* でもある。円は多角形の最も完全な形であるが、M. A. Rugoff は ‘... that “of all figures a circle is the most perfect.” The idea of the circle’s perfection and infinity naturally suggests an identification with the deity.’¹³ と言っている。このように円はあらゆる形の中で最も完全であるが、可動脚が同一円周上を *endless* に動くことができることによって完全さと同時に永遠不滅を表すことにもなる。これは二人の愛の完全さと永遠不滅の *metaphor* であり、先に述べた金のそれとまったく

一致することになる。完全で永遠不滅の象徴である円は、それ故に先の M. A. Rugoff 氏の引用の後半にあるように、神性を帯びることになるのである。これが魂を一つと成した二人の愛の聖なることを証明する。従ってこの円の metaphor と冒頭の聖人の simile とは聖なるものでつながられていることになる。天球もまた月より上にあつて神性を宿し、故に完全で永遠不滅の存在であるから、円と同様の象徴性を持っている。金と円については既に述べた通りである。従ってこの円の metaphor に冒頭からの simile や metaphor がすべて含まれ、最終連はみごとな大団円を迎えるが如くに見える。しかしこれらは円の metaphor に重ね合わされているだけ、繰り返されているだけという印象は免れない。聖人の simile や天球・錬金術の metaphor が金に収れんして行く時に覚えるあの衝撃、巧みな言葉使いに対する感動はもはやこの円の metaphor には見られない。この円の metaphor には錬金術のそれはほとんど見られないし、聖人の新たな生の metaphor は二人の再会に暗示されているだけである。別れが死であれば、新しい生は話者が戻って二人が再会することと考えられる。この生と死の metaphor を J. Freccero は復活という観点から論じている。その為に神学論を導入するのであるが、氏は他に天文学、形而上学、錬金術論を導入してこの詩を論じている。この詩を論ずるに当たって必ず読まなければならないそして非常に有用な優れた論文ではあるが、この論文は哲学的過ぎる解釈の為にいわゆる人間不在の観を否めないのである。われわれがこれ迄見て来たように、この詩に悲しむのを止めない恋人をなんとか説得し慰めようとする話者を見た方が、またその為に話者の論理が中断したり論理に欠陥があるのだと考えた方が、より人間的な解釈であり、それによってこの詩の抒情性がより豊かになるのである。この詩は H. J. C. Grierson も 'They (i. e. *A Valediction: forbidding mourning and Sweetest love I do not go*) are certainly the tenderest of Donne's love poems, perhaps the only ones to which the epithet 'tender' can be applied.'¹⁵ と言うように恋人への愛情、優しさに溢れた詩なのである。確かに John Donne の詩には強引な程の論理性の目立つ詩は多いが、この詩の論理性の欠如が却って豊かな話者の情感を生み出し John Donne にはめずらしい詩を生み出すこととなったのである。

III

この詩は別れを悲しむ恋人をなだめ慰めようとする話者の優しさの溢れた抒情性豊かな詩であり、魂を一つと成した二人の愛の永遠不滅がうたわれた詩である。しかしこの解釈では捉えられないもう一つ別の意味がこの詩には隠されている。話者の論理性の欠如の中に話者の恋人に対する心情を見たのであるが、これは話者の恋人に対する説得に表れた話者の心の動きであつて、話者そのものの心の内にある思いではない。つまり表立っては顕れないこの詩の話者の内面という観点からもう一度捉え直すと、この詩にはまったく違う意味が隠されていることがわかってくる。論理性の欠如の中にも表されているが、網の目のように張り巡らされた言葉の意味に秘かに話者のさまざまな思いが表されているのである。それは端的に言うとは別れに伴う不安と悲しみである。例えば恋人に泣くなとさす第二連第二行の 'No teare-floods, nor sigh-tempests' という表現には、恋人を説得しようとする話者自身が恋人と同じように別れを泣き悲しんでいることが表されている。誰もが恋人との別れは悲しいものであり、泣きたくなる気持を持つのは当然のことであり、ましてや大陸への旅であるとすれば不安も隠し切れないであら

う。当時の船旅であれば尚更 ‘tempests’ は大敵である。こう考えるとこの行には前の解釈とは逆の意味があることになる。このペトルカ流の決り文句を否定することによって二人の愛が俗人の愛とは違うことが示されたのであるが、実は話者も俗人と同じように別れが不安なのである。同様に話者は第五連第四行で ‘Care lesse, eyes, lips, and hands to misse.’ と言いながらも実は ‘eyes’ ‘lips’ ‘hands’ は必要なのである。‘lesse’ が問題のある表現だということは前に指摘したが、二人の靈的愛を語る場所であるから ‘lesse’ ではなく完全に否定した方が、より恋人に対する説得としては有効なはずである。‘lesse’ というあいまいな言葉使いの中に話者の思いが隠されているのである。恋人に語る話者の愛の論理は思いつきでもでまかせでも決してないのだが、その一方で話者は俗人と同じように別れに不安を抱き、離れることによってなくすことになる ‘eyes’ ‘lips’ ‘hands’ を ‘Care’ しているのである。これは話者が愛の官能性に強い関心を持っていることを示すのである。C. A. Patrides は ‘Care’ で始まるこの行に関して ‘The oddity is in the last line, which in accordance with the norm should have had only four stresses but has six : *Cáre lésse, éyes, líips, hánds to mísse.*’¹⁶ と言い、‘... the physical separation of the lovers will matter very much, as matter very much it must.’¹⁷ とこの行を解釈している。この話者の恋人の肉体に対する欲望がコンパスの simile で始まる第七・八・九連にも表されている。P. G. Pinka は ‘growes erect’ (St. VIII, l. 4) に ‘an underlying phallic suggestion’¹⁸ があることを指摘し、D. Novarr は ‘... such a collocation of words as “stiffe,” “foot,” “center,” “erect,” “firmnes,” and “circle” would carry erotic overtones, ...’¹⁹ と言っている。更に T. Docherty は ‘... the firmness could be the erect penis, the ‘stiff leg’ as it were, and the circle could be the vagina ; and the ‘ending’ becomes in this the female orgasm, ...’²⁰ と具体的に説明している。T. Docherty 氏の見解に全面的に賛成するものではないが、このようにこの三連には性の connotation を荷なう語がかなり多く見られることは否定できない。二人の靈的愛の永遠不滅を語る話者の中にこれとはまったく相反する性の意識が濃厚にあることになる。また第六連の ‘yet’ (l. 2) と ‘breach’ (l. 3) には恋人に対する不信の念が表されている。‘breach’ は地震に喩えられた俗人の愛の亀裂を述べる語であると前に考えたが、二人の愛の metaphor である金泊も薄く伸ばされれば伸ばされる程やがて破れ裂けることになる。この不安が話者に急いでコンパスの simile を考えさせることになったとも考えられるのである。金泊は旅の話者と残る恋人との距離の metaphor であるから、その距離を無限に伸ばすことはできないという不安がある。たとえ話者の念頭にあの地球儀に貼る一枚の地図のコピーがあったとしても、恋人と遠く離れているという心理的不安は大きいはずである。またこの不安は同時に長期間留守にすることから生まれる不安でもある。遠く離れ長期間不在ということになれば、その間に恋人が心変わりするかもしれないし浮気をするかもしれないという不安が生まれる。これが ‘breach’ に込められたもう一つの意味であり、恋人に対する不信の念の表れである。‘yet’ にもこの話者の不安が表されている。‘yet’ は、話者の論理に従えば、「しかしながら」と考えられるべきであるが、「今はまだ」という意味も一方にはある。今はまだ出発前だから心変わりしたり浮気をすることはないけれど、旅に出かけたらわからないという話者の恋人に対する不信が表されているのである。‘Inter-assured of the mind’ (St. V, l. 3) を語るあの話者の姿はここにはない。話者の心の中で恋人に対する疑惑と不信が渦を巻いているのである。この話者の疑惑と不信が円の固定脚について言う ‘Thy firmnes’ (St. IX, l. 3) に更に明確に表されている。円には前に述べた象徴の他に R. Freeman が

‘... Donne was using an accepted emblem of constancy’²¹ と言っているように constancy の象徴がある。この語には「不変」の意味があるが、これは先に解釈したように可動脚が同じ円周上を回転することができることから生れた象徴であろう。つまり永遠不滅と同義であり金の象徴でもある。しかし「貞節」という意味もありこれが ‘firmnes’ と呼応して恋人に対する不信の念を明確に表すことになるのである。OEDによれば ‘firmnes’ には ‘faithfulness’ の意味がある。円の象徴である constancy のもう一つの意味が ‘firmnes’ に重ね合わされているのである。従って話者の不在の間恋人が貞節を守ってくれれば、恋人の元に帰ることができるという意味を表すことになる。しかし恋人に貞操を求める話者は逆に言えば恋人の貞操に不安を抱いていることになるのである。永遠の愛を誓いながらも、話者は恋人の貞操に疑念を抱き、愛の官能性に強い関心を持っているのである。恋人を信じたいけれど完全には信じ切れない、愛の官能性を否定しながらも欲望を捨て切れないというまったく相反する矛盾した二面が話者の中に同時に存在しているのである。これは魂による愛の永遠性そのものに対する疑惑の念を話者が抱いていることに原因がある。つまり話者は中世以来連綿と続いて来た靈魂の絶対優位性が信じられなくなっているのである。この不信が話者の内面を激しくゆさぶり、その為には彼の言動が矛盾することになるのである。靈魂の絶対優位性が崩れ靈魂と肉体が並置されることによって霊と肉の二元論が生じたのであるが、話者もまた霊と肉の二元論に引き裂かれているのである。靈的愛を体験しながらも官能的愛に戻ろうとする話者が描かれた *The Extasie* にも二元論が表されている。この二元論はもともとカトリックとプロテスタントが激しくせめぎ合った宗教改革及び反宗教改革によって起った信仰上の問題であるが、靈魂の絶対優位性の崩壊は中世の哲学体系に組み込まれていた *The Chain of Being*²² という思考方法の解体を意味するものである。この考え方によって地上のものから天界のもの迄すべてが照応と対比によって順序づけられ説明され、世界は秩序と調和が保たれていたのである。しかしこれが崩壊することによって、例えば大宇宙（自然 [天界を含む]）と小宇宙（人間）の照応関係、人体の中に綿密に組み立てられた魂と肉体の関係など一切が疑惑の渦に投げ込まれることになるのである。二元論の背景にある靈魂の優位性の崩壊は旧来の世界観の崩壊であり、これによって人は不安と不信の渦に巻き込まれ、その内面が分裂するのである。愛の永遠不滅をうたいあげる話者の中に均衡と調和のとれたこれ迄の恋愛観が現れ、恋人に対する不信と官能性に強い関心を抱く話者にこの恋愛観に対する不信が映し出されているのである。この話者の中に表された不安と不信による内面分裂は、確固としてあった旧来の世界の崩壊とまだ新しい世界の見えてこない時代のはざまにある不安と不信にさいなまれる人間の内面分裂である。時代を変動させたのは宗教改革や反宗教改革だけではない。ケプラーやコペルニクスの天文学上の新しい発見によってトレミーの天文学の体系に疑惑が生じたことも一つの大きな要因である。この新天文学の出現がまさに旧世界観を土台からゆるがすことになったのである。少なくとも当時の知識人にとっては大きな衝撃であったと思われる。このように宗教改革あるいは反宗教改革更にまた新天文学の出現によって、社会は大混乱の様相を呈し揺れ動いていたのである。これ迄あった価値観が崩れ、しかもまだ新しい価値が生まれていない時代の秩序と統一を欠いた世界にあっては人は不安と不信に陥れられ内面は分裂するのである。この不安と分裂はルネッサンス末期の時代を特徴づけるもので、この時代の芸術様式を W. Sypher²⁴ はマニエリスムと名付けている。霊と肉に引き裂かれた話者を描いた *A Valediction : forbidding mourning* という詩もまたマニエリスムの詩とすることができる

であろう。

注

1. H. J. C. Grierson ed., *The Poems of John Donne*, Oxford, 1968, vol. I. 本文中の引用はこの版による。
2. *Oxford English Dictionary*, Oxford, 1970. 以下 OED の引用はこの版による。
3. T. Redpath ed., *The Songs & Sonnets of John Donne*, Methuen, 1983, p. 262.
4. E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture*, Chatto & Windus, 1967, pp. 35-36.
5. T. Redpath, *op. cit.*, p. 262.
6. *Ibid.*, p. 263.
7. 'This adjective (i. e. 'refin'd') continues the alchemical association of "elemented." (M. Willy, *The Metaphysical Poets*, Edward Arnold, 1971, p. 20.)
8. "Severall soules" is a semantic pun: it means both "the souls of individual men" and "the individual souls within the single person." The latter meaning suggests the Aristotelian-Thomistic notion of the tripartite soul (vegetative, sensitive, rational), with its emphasis on the soul's inextricable involvement with and dispersal throughout the living body, and this undercuts the immediate context, which assumes a neat soul-body separation.' (F. A. Marotti, *Donne and "The Extasie" in The Rhetoric of Renaissance Poetry*, eds. T. O. Sloan and R. B. Waddington, University of California Press, 1974, p. 149)
9. T. Redpath, *op. cit.*, p. 263.
10. E. M. W. Tillyard, *op. cit.*, p. 39.
11. W. A. Murray, *Donne's Gold-Leaf and his Compasses*, *Modern Language Notes*, vol. LXXIII, May, 1958, p. 328.
12. J. T. Shawcross ed., *The Complete Poetry of John Donne*, Doubleday & Company, Inc., 1967, p. 87. 多くのテキストや研究書でこの種の引用がなされているが、1611年というこの詩の製作年代については例えば T. Redpath は疑問視しており、H. Gardner は第二連をあげてこの詩は妻に宛てて書かれた詩ではないと言っている。(T. Redpath, *op. cit.*, p. 262., H. Gardner ed., *The Elegies and the Songs and Sonnets of John Donne*, Oxford, 1965, p. xxix.)
13. M. A. Rugoff, *Donne's Imagery*, Russell & Russell, 1967, p. 65.
14. J. Freccero, *Donne's "Valediction : forbidding mourning" in Essential Articles for the study of John Donne's Poetry*, ed. J. R. Roberts, Archon Books, 1975, pp. 279-304. この論文の初出は1963年である。他に復活の観点から論ずる論文は K. R. Kremen, *The Imagination of the Resurrection*, Bucknell U. P., 1972 等がある。
15. H. J. C. Grierson, *op. cit.*, vol. II, Commentary, p. 40.
16. C. A. Patrides, *The Complete English Poems of John Donne*, J. M. Dent & Sons

- Ltd., 1985, p. 17.
17. *Ibid.*, p. 18.
18. P. G. Pinka, *The Dialogue of One*, The University of Alabama Press, 1982, p. 144.
19. D. Novarr, *The Disinterred Muse*, Cornell U. P., 1980, p. 58.
20. T. Docherty, *John Donne, Undone*, Methuen, 1986, p. 75.
21. R. Freeman, *English Emblem Books*, Octagon Books, 1978, p. 147.
22. E. M. W. Tillyard, *op. cit.* 及び A. O. Lovejoy, *The Great Chain of Being*, Harvard U. P., 1971.
23. C. M. Coffin 氏は本詩の 'Moving of th'earth' (St. III, l. 1) に新天文学の暗示があることを指摘している。(C. M. Coffin, *John Donne and the New Philosophy*, The Humanities Press, 1958, pp. 97-100) また *The First Anniversarie* に
- And new Philosophy cals all in doubt, The Element of fire is quite put
out ;
- The Sunne is lost, and th'earth, and no mans wit
Can well direct him, where to looke for it. (ll. 205-208)
- という句がある。(W. Milgate ed., *The Epithalamions, Anniversaries, and Epicedes of John Donne*, Oxford, 1978) 従って John Donne は新天文学に関する知識を持っていたと考えられる。
24. W. Sypher, *Four Stages of Renaissance Style*, Doubleday & Company, Inc., 1978.